

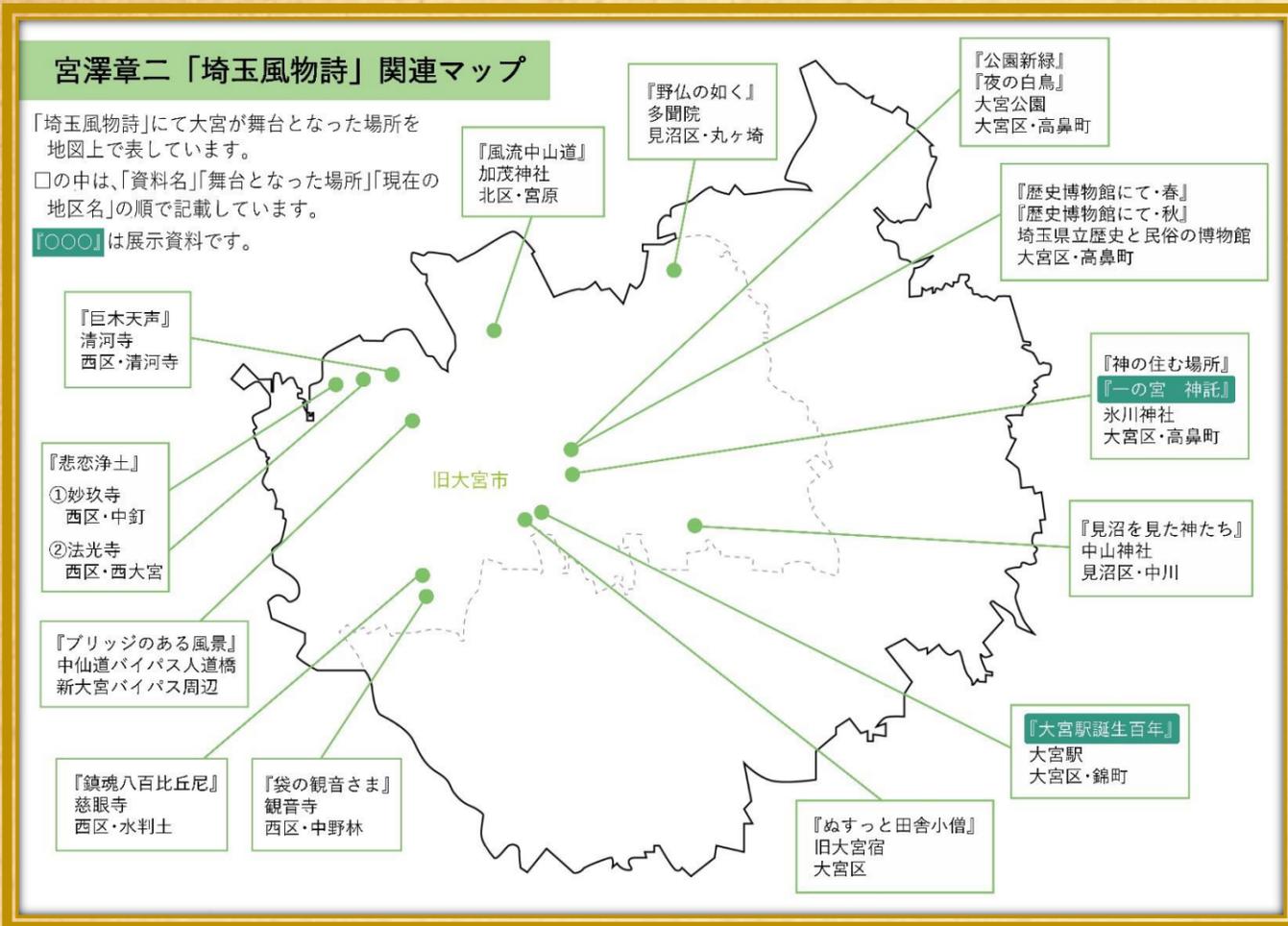
# 企画展 詩人・宮澤章二と大宮



2020年11月7日(土)～2021年1月6日(水)



イラスト：仲佳



## 参考文献

- 『埼玉風物詩集』宮澤章二/著 埼玉新聞社出版部 1966年
- 『童謡の中の人生—私の童謡論—(まみず新書 22)』宮澤章二/著 柏樹社 1969年
- 『出発の季節(ほくしん詩集)』宮澤章二/著 北辰図書 1980年
- 『埼玉現代文学事典 増補改訂版』  
埼玉県高等学校国語科教育研究会・埼玉現代文学事典編集委員会/編  
埼玉県高等学校国語科教育研究会 1999年
- 『宮澤章二の世界—大宮が生んだ風と光の詩人—』  
大宮市立図書館/編 大宮市教育委員会 2001年
- 『宮澤章二—風と光の詩人 企画展』さいたま文学館/編 さいたま文学館 2015年
- 『紀要』第10号 埼玉県立歴史と民俗の博物館/編 埼玉県立歴史と民俗の博物館 2016年
- 『ラジオ歌謡研究』第9号 日本ラジオ歌謡研究会 2018年
- 「埼玉・人どころ」1975年10月号・1986年9月号 埼玉文化懇話会
- 「アコレおみや」2019年4-5号 アコレおみや編集室
- 「埼玉新聞」1988年7月31日・1995年4月19日・1995年11月22日

2020.11.7 発行  
さいたま市立大宮図書館  
さいたま市大宮区吉敷町 1-124-1  
電話 048-643-3701

1	自筆色紙「知らない子」
2	詩集『知らない子』1990年 国土社出版
3	パネル「行為の意味」(データ提供:羽生市立郷土資料館)
4	CD「行為の意味」2010年 (株)サムライ
5	宮澤氏のスナップ写真(宮澤新樹氏より借用)
6	自筆原稿「みち考」
7	自筆原稿「このまち驛」
8	昭和50年代の大宮駅東口の写真(データ提供:さいたま市)
9	昭和50年代の大宮駅西口の写真(データ提供:さいたま市)
10	自筆原稿「大宮誕生百年—大宮・国鉄・大宮駅」(埼玉風物詩より)
11	(合本版)雑誌「さいたまグラフ」1985年3月号 埼玉グラフ株式会社
12	(合本版)雑誌「さいたまグラフ」1983年10月号 埼玉グラフ株式会社
13	自筆原稿「一の宮 神託—大宮・氷川神社—」(埼玉風物詩より)

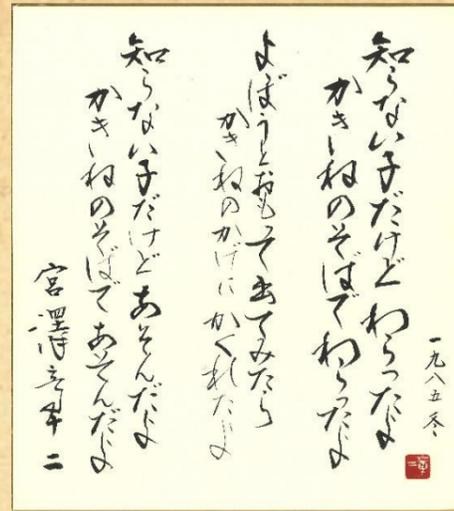
## 1 風と光の詩人

宮澤章二は、作品に「風」と「光」の言葉を多く使っていることから“風と光の詩人”と呼ばれ、38歳の時に一家で大宮へ移り住み、以降をこの地で過ごしました。

詩集を発表する傍ら、埼玉県内の中学生に向けた詩の創作にも熱心に取り組み、「行為の意味」の一節、〈心はだれにも見えないけれど、心づかいは見える。思いは見えないけれど、思いやりはだれにも見える〉が、東日本大震災後にACジャパンのキャンペーンCMで頻繁に放映されました。

また、校歌の作詞は県内を中心に300校以上にのぼり、大宮図書館にほど近い大宮南小学校でも、宮澤作詞の校歌が歌われています。

さらに、童謡「ジングルベル」の翻訳を手掛けたことでも知られ、小学校の音楽の教科書では、昭和46年度以降、宮澤の訳詞が掲載されています。



自筆色紙「知らない子」(No.1)

## 2 詩との出会い

宮澤章二は、1919(大正8)年、北埼玉郡三田<sup>みたかや</sup>谷村大字弥勒<sup>みろく</sup>(現・羽生市弥勒)の米穀肥料商を営む家の長男として生まれました。

1928(昭和3)年、東京に転居し東京府立高等学校を卒業。一旦父の勧めにより東京帝国大学経済学部へ入学しますが、父が他界すると大学を中退。郷里の羽生へ戻り尋常高等小学校の代用教員として務めました。好きだった文学を学ぶため文学部美学美術史学科に再入学します。

三好達治<sup>みよし たつじ</sup>の詩集『春の岬』<sup>はる みさき</sup>を読んで詩に魅了された宮澤は、大学在学中から詩を作り始めました。また、15歳で母を、20歳で父を亡くした境遇が詩を作るきっかけになったとも回想しています。

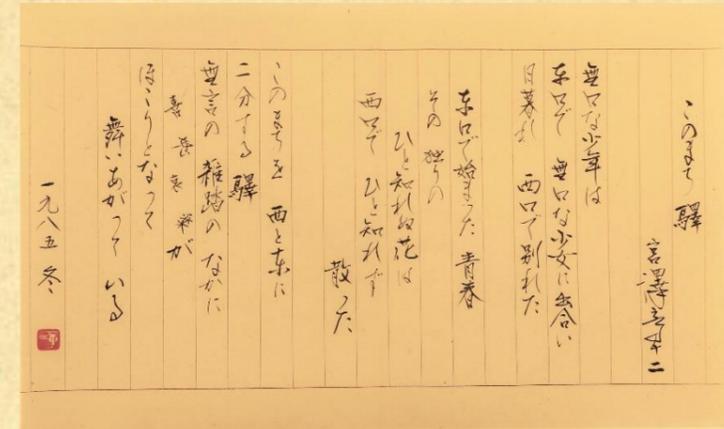
1945(昭和20)年3月に、国民学校の卒業式で歌われた「花かをる」は、宮澤の作詞であり、当時の文部省の公募によって選ばれたものでした。

## 3 大宮への移住

1947(昭和22)年、宮澤は埼玉県立不動岡中学校(現・埼玉県立不動岡高等学校)に勤め、国語を教えていました。この間作曲家・下總皖一<sup>しもおさかんいち</sup>という知己を得、歌曲や校歌の仕事を手掛けるようになった宮澤は、文筆業に専念するため退職を決意します。

東京都荒川区町屋に引っ越した宮澤は、1956(昭和31)年に第一詩集『あんぷくの臍』<sup>へそ</sup>を刊行しましたが、執筆に打ち込むには静かに落ち着ける環境が必要と考え、1957(昭和32)年に妻子とともに大宮市吉野町(現・さいたま市北区吉野町)に移り住みました。現在は、宅地化され見る影もありませんが、一家が引っ越してきた頃の吉野町は雑木林や茶畑があちこちに残る、新緑と空気がきれいな場所だったそうです。

生まれ故郷の羽生について、第二の「ふるさと」となった大宮で、宮澤はその自然や風物を題材に、次々と“詩”を生み出していました。



自筆原稿「このまち驛」(No.7)

## 4 「埼玉風物詩」と大宮

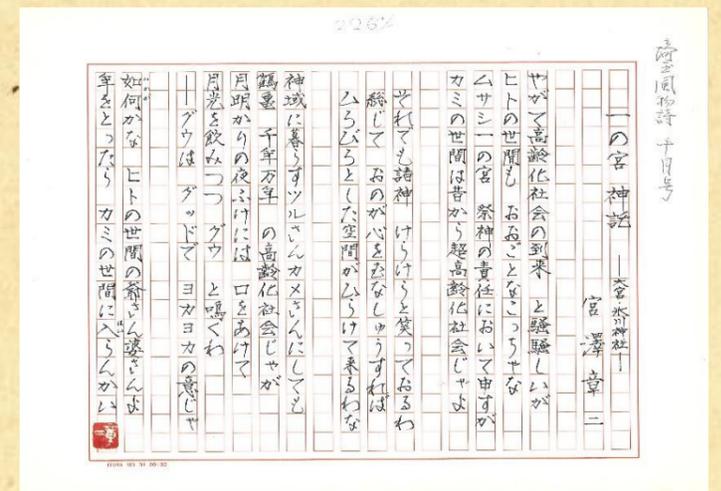
「埼玉風物詩」は、宮澤による埼玉県内の各地を舞台にした一連の作品です。自分が生まれ育った埼玉を自分の足で歩き、自分の目ではっきり見つめてみたいという思いが強くなり、創作のきっかけとなったようです。

1963(昭和38)年に宮澤の個人詩誌『礫』<sup>れき</sup>で発表されたのを皮切りに、ほどなく埼玉新聞へ掲載が移りましたが、1971(昭和46)年に一旦終了となります。その後、1973(昭和48)年から、月刊誌「さいたまグラフ」にて再び風物詩の続編が掲載されることになり、1995(平成7)年体調不良で休載するまで、連載は毎月続けられました。

全297篇中、大宮市が舞台となった作品は16篇と最も多く、今回展示している原稿のほか、

“見沼を見た神たち—大宮・氷川<sup>ひかわ</sup>簸王子宮<sup>ひおうじぐう</sup>”や

“歴史博物館にて・春—大宮公園・埼玉県立博物館”などがあります。



自筆原稿「一の宮神託—大宮氷川神社」(No.13)